

【共同研究】

地域の記憶を未来につなぐ

——明治維新 150 年と NHK 大河ドラマ「西郷どん」の放映によせて——

佐藤 宏之

はじめに——明治維新 150 年を考える

2018 年は、明治維新から 150 年にあたり、全国各地で関連イベントが行われている。わたしが暮らす鹿児島においても、ほぼ毎日とっていいほど関連イベントに関するニュースが流れ、NHK 大河ドラマ「西郷どん」の放映に沸いている。しかし、その 150 年は暦のうえでの話であり、何ら歴史の把握ではない。

「明治 150 年」関連施策各府省連絡会議は、「国における「明治 150 年」関連施策」として、①明治以降の歩みを次世代に遺す施策、②明治の精神に学び、さらに飛躍する国へむけた施策、③明治 150 年に向けた気運を高めていく施策の 3 つの施策を掲げた。

①では、時間の経過等によって散逸・劣化が懸念されている明治以降の日本の歩みを改めて整理し、未来に遺すため、国立公文書館や博物館等において明治期等の資料等の収集・整理や保存を行うとともに、特別展示を行う【明治期の資料等の収集・整理、保存及び展示】、明治以降の日本の歩みを未来に遺すとともに、誰もが、いつでも明治期の資料や情報にアクセスできるよう、明治期の資料等のデジタルアーカイブ化等を推進する【デジタルアーカイブ化等の推進】、地方公共団体や民間において、明治期の資料や建築物などの保存や、デジタルアーカイブ化などの取組が日本各地で推進されるよう、交付金や補助金事業の活用などを含めて支援を行う【地方公共団体及び民間の活動支援】の 3 つを柱に、②では、明治期に活躍した若者、女性及び外国人の活躍を知り、そのよりどころとなった精神をとらえることができる

よう、関係機関等において、明治期の若者、女性及び外国人に光をあてた特別展示やシンポジウムの開催などのほか、国際交流等を実施する【若者、女性及び外国人の活躍を取り上げた施策】、日本の技術や文化などの強みを再認識するため、博物館等において明治期の技術や文化芸術に関する特別展示及びシンポジウムの開催等を実施する【明治期の技術及び文化芸術に触れる機会の充実】の 2 つを柱に、③では、日本全体で「明治 150 年」に向けた機運を高めていくため、ロゴマークの作成や各種媒体を活用した広報展開、海外向け情報発信を推進する【広報関係・情報発信】、日本全体で「明治 150 年」に向けた機運を高めていくため、明治 150 年記念を冠した記念事業や記念イベントを実施する【記念事業・大会】の 2 つを柱に進めることが定められた (https://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/pdf/h291231_kanrensisaku_kuni.pdf)。

一方、「経済財政運営と改革の基本方針 2017 ～人材への投資を通じた生産性向上～」(2017 年 6 月 9 日閣議決定)には、「文化経済戦略(仮称)」を策定し稼ぐ文化への展開を推進する」とある。

明治維新 150 年における文化政策とは、文化を「稼ぐ文化(稼げる文化)」とそれ以外に選別し、「稼ぐ文化(稼げる文化)」を活用するということになるだろうか。地域の歴史・文化遺産を観光資源化し、保存・研究・学習よりも商品として消費することが求められ、その一方で、「戦争の記憶」はほとんど触れられることはなく、近代化の一方向的礼賛が進められる。

本稿では、こうした状況を①歴史の観光資源化／商品としての大量消費化と、②「戦争の記憶」を未来へつなぐ、という 2 点から論じてみたい。

1. 歴史の観光資源化／商品としての大量消費化

ひとたび、大河ドラマの放映が決まると、その人物の「ご当地」や関連地域では、それを観光や地域振興の資源とすべく「ご当地」ブームが巻き起こる。大河ドラマは、地域にとって観光客の増大、経済波及効果が期待でき、歴史や文化で稼ぐうえで優良なコンテンツといえる。全国各地で、戦国時代さながらの「大河ドラマ誘致合戦」が繰り広げられている。

「ご当地」では、主人公はもとより、主な登場人物を通して地域の歴史や文化の発掘・見直しが行われ、その歴史の商品化、ひいては歴史の大量消費が進められる。しかし、つぎの大河ドラマが発表され、新たな「ご当地」が誕生すると、観光客が減少するなど環境が変化し、ブーム終了後の不景気がおとずれ、地域には「一体なにが残ったのだろうか？」という思いだけが残ることになる。しばしば大河ドラマの観光資源としての一過性が問題視される。大河ドラマの功と罪である。

2018年大河ドラマ「西郷どん」の主人公、西郷隆盛は無私無欲の生きざま、大に敵する剛胆な天性、胆力、決断力に人間的魅力を感じる人が多い。西郷隆盛は、安政の大獄、禁門の変、第一次征長、薩長盟約、王政復古、戊辰戦争、廃藩置県、征韓論政変、西南戦争……といった多くの歴史的瞬間に、政局の中心人物 or 流人、明治国家の最大の功労者 or 征討の対象となった最強の反逆者、武士の終焉を代表する存在 or 近代化の基礎を構築する存在として登場している。

こうした歴史上の人物は、歴史の流れに大きな影響を与えた人物であり、国家・社会の発展に大きな働きをした先人と評価することができる。歴史上の人物の歴史だけで歴史の流れを説明することは可能であるが、個人の伝記をいくら多く並べたところで、歴史の流れの全体にはならない。過去に生きた人びとのすべては、歴史の流れの方向や速度の決定に、意識するとしないとを問わず、大なり小なり、直接的あるいは間接的に、参加していた。歴史の動因が、歴史上の人物の個性や行動にのみ求められると、個人的な実力や野望だけが重視され、それを側面から支えていた社会的あるいは政治的な情勢がまったく無視されてしまう。それによって、はき違えた英雄主義に陥る危険性がある。ある場面では有能であっても、別の場面では無能であるかもしれない。あるところでは物腰が柔らかいが、別のところでははなはだ横暴かもしれない。ある関係では民主的であるが、別の関係では独断的かもしれない。職業人としての働きと、家庭人としてのふるまいにはズレはないか。歴史上の人物は、大きく歴史の流れに関与するが、同時に歴史の流れによって作り出されるものでもある。大切なことは、歴史上の人物がいかに歴史の流れの決定に参画していたかを知ることである。

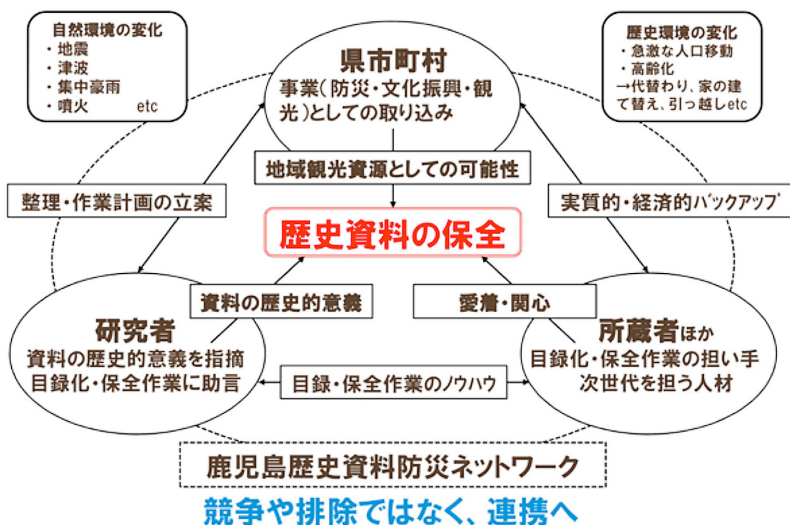
「西郷どん」を見て、西郷のようになりたいと思う人がどれだけいるだろ

うか？ むしろ、いまの世に西郷のような人が現れてくれればいいのと思う人のほうが多いのではないだろうか？

現代に生きるわれわれも、現代の歴史をまさにいま、自らの手によって作りつつあることの自覚を促すこと。それによって、自分たちが生きている「現在」を歴史的にとらえる目を養うことができるのではないだろうか。

薩摩藩の歴史は、藩主の開明的性格や、近世後期から幕末期における藩の新事業＝「近代化」事業、あるいは幕末維新における西郷隆盛や大久保利通を中心とした政治動向など、いわゆる「先駆」「栄光」を中心に語られやすい。改めて、近世に芽生えていた近代（本来的近代）と、現実に実現した近代（歴史的近代）という視角から問い直す意義があるように思う。そのさい、史実を確定させるモノとしての歴史資料の存在が重要である。なぜなら、歴史資料に依拠しない「歴史」を妄想に等しいからである。その歴史資料は、社会との関わりのなかで作成される地域の「記憶」・地域の「履歴書」であり、人びとがそこで暮らし、生きていた証拠というべきものである。しかし、文化財に指定されていない、民間所在資料の数は膨大であると同時に、廃棄される危険性も大きい。こうした歴史資料が文化「財」であることの意味を問い、それを守り、伝える人（大学生・大学院生・地方史研究を志す人な

▶ 「鹿児島歴史資料防災ネットワーク」構想



ど）をどのように継続的に養成するかが大きな課題でもある。

大学は運営費交付金の減少などで体力が奪われ、大学の組織再編のしわ寄せが人文系・教育系へとおよび、わたしが所属する教育系は専門職大学院への一本化に突き進んでいる。もはや、膨大な民間所在資料を目の前にして、「専門家」だけでそれに対応しようとしても、とてできるような状況にない。そこで、わたしは2013年9月より、「鹿児島県歴史資料防災ネットワーク」構想（左図）のもと、歴史資料を災害（自然・歴史）から守る取り組みを行ってきた。大切なことは、競争や排除ではなく、とにかく連携することだと考える。

2. 「戦争の記憶」を未来へつなぐ

まず、「戦争の記憶」をめぐる日本社会の現状をおさえておきたい。近年、侵略戦争や植民地支配による加害責任を否認する考え方（自由主義史観や歴史修正主義）が勢いを増している。こうした状況下で、過去そして将来の戦争を肯定的にとらえる思想を有する「戦争博物館」が復活・台頭してきている。そこでは、「平和」の維持・安定のために軍事力の保持と行使が正当化され、「国家」による死が正当化・美化されている。また、戦争の実態より、日本の近代化やそれを支えた造船・科学技術・生活・文化が誇張されている。また、学生に話を聞くと、「文書（資料）が残されていないのなら嘘ではないのか」「被害者意識を持ちすぎではないか」「自分とは関係がない」「私がやったわけではない」「知って何の得になるのか」「イメージしにくい」「押しつけがましい」「説教くさい」といった反応が多い。すなわち、直接体験を持たない世代、戦争や植民地支配の過去を知らず、その史実を十分に学んでこなかった世代が、「戦争の記憶」をどう受け継いでいくのか、今日の教育的課題であるといえよう。

わたしは、存在したものとしての戦争の実態解明をすべく、2014年10月から、鹿児島県出水市で教育委員会や一般社団法人出水民泊プランニング・平和学習ガイドとともに「出水市戦争遺跡等保存活用プロジェクト」を立ち上げ、継承されにくい、すでに消滅しかかっている「戦争の記憶」の発見・

発掘、当時の生活の様子がうかがえる資料の収集・保全を行うために戦争体験者への聞き取り調査を開始した。出水市内全戸へ自治会のみなさんの協力を得て情報提供を呼びかけるビラを配布・回収し、これまで約 100 名の証言を映像と音声で集めることができた。なかには、戦時中に書かれた日記や「軍極秘」と朱印が捺された資料など、当時の生活をうかがうことのできる資料を新たに発見することもあった。

これまでこうした証言を用いた歴史研究が行われていなかったわけではない。それはオーラルヒストリーと呼ばれ、むしろ盛んに行われてきたといえる。しかし、オーラルヒストリーによって集められた記録は、聞き手となった研究者が自身で行う研究以外に、第三者が同じ素材を使って研究することなどほとんどなく、聞き手の関心に惹きつけた特定のテーマに特化していたり、あるいは第三者が生データの活用できなかつたりという問題がある。したがって、それはあくまでも記録化した本人が使うためのものであって、第三者の利用を想定した「公共化」について、これまでほとんど考慮されてこなかったといえる。

しかし、このような第三者によって検証することができない「資料」を使った歴史研究は果たしてどこまで有効なのだろうか。人間はある体験を頭のなかで整理して記憶とする。年月を経るにしたがって情報を解釈して整理し続けるのであり、生の体験がそのまま記録になるわけではない。しかも、その時々、社会的価値観に意識的にせよ無意識的にせよ影響を受け、再解釈され続けるものでもある。また、聞き取り調査の場合、聞き手が記録作成の主導権をもち、話者はあくまでも受動的であるため、聞き手の意図や価値観が反映されやすいともいうことができる。したがって、内容の証拠性を確保し、それらを広く一般に公開して活用の道を開くことは重要かつ喫緊の課題であるといえよう。

証言記録を集めるためには、その時々、流行や関心とは一線を画さなければ継続的かつ網羅的な収集は難しい。そこで、聞き手の意図や価値観を反映させないためのガイドラインを策定し、体験者のライフヒストリー（生まれてから現在まで）を追う形式で、統一した基準・観点から聞き取り調査を実施した。それによって、そのとき、どのような立場で、なにをやっていたのか、比較検討が可能になったのである。これまで約 100 名の証言記録を映

聞き取り調査ガイドライン

1. 聞き取り調査をはじめる前に
 - 聞き取り調査の目的：「戦争体験」を公共財として後世へ伝えること
 - 集められた「戦争体験」＝不特定多数の利用者を想定した公共性を持つもの
 - 聞き手の意図や価値観、その時々々の流行や関心とは一線を画す必要
 - どのような形で活用するか（平和学習・観光など）は利用者が考えるべきもの
 - 聞き取り調査＝語り手と聞き手の共同作業
 - 語り手はなにか伝えたいことを持っている。いちばん伝えたいことになにか。それを探る。
 - 語り手が主導権を持ち、聞き手はそこに寄り添いつつ事実確認（質問）を行うライフヒストリー（時系列に沿って）を軸に据える
2. 聞き取り調査の方法
 - 2人ないし3人一チームで行う
 - ICレコーダー2台、ビデオカメラ1台で録音・撮影を行う
 - ①経歴情報Ⅰ
 - 生年月日、生誕地
 - 父の名前、母の名前、父の仕事、母の仕事
 - 兄弟姉妹
 - 語り手の教育など
 - ②戦時下の暮らし
 - 暮らし（衣食住）……暮らし向きはいかがでしたか？なにか生活で不自由なことは？
 - ※隣組、切符制、配給制度、標語など
 - 暮らし（学校）……学校での生活はいかがでしたか？
 - ※教育内容・教科書、千人針・慰問袋、学童疎開、勤労動員、学徒出陣など
 - 出水基地……出水基地の建設と施設補修、食料・資材の供給
基地配属部隊（真珠湾攻撃部隊・練習航空隊・特攻隊）
 - 空襲……昭和20年4月の出水空襲についてどんな記憶でもお聞かせください
※防空演習・防空壕・防空ずきん・灯火管制・強制疎開など
 - ③軍隊（前線・内地）
 - 所属軍隊と配属
 - 軍隊での生活（訓練・戦闘）
 - ④終戦前後
 - 新型爆弾（広島・長崎での原爆投下）
 - ソ連対日参戦
 - 本土決戦（竹槍訓練）
 - 昭和20年8月15日、どこで、何をしていましたか？終戦の知らせを聞いてどう思いましたか？
 - 引揚げ……いつ、どこから、どのように？
 - シベリア抑留・BC級戦犯／GHQ（米軍兵士）との接触／公職追放／農地改革
 - ⑤経歴情報Ⅱ：戦後から現在まで
 - 居住地
 - 仕事
 - 結婚：配偶者（生年月日）、出会いの場所
 - 子ども
 - ⑥戦争を振り返って、どんなことを次の世代に伝えたいですか？

像・音声・文字で集め、90 歳以上の 12 名の証言をまとめた『【出水の歴史資産】出水の戦争体験談集 I』を 2017 年 3 月に刊行したので参照いただきたい。

この聞き取り調査の特徴は、調査の目的を「戦争体験」を「公共財」として後世へ伝えることとし、集められた「戦争体験」を不特定多数の利用者を想定した「公共性」を持つものとしてとらえている点にある。それをどのような形で活用するか（平和学習・観光など）は利用者が考えるべきものという考えのもと、聞き手の意図や価値観、その時々々の流行や関心とは一線を画すことに注意を払った。また、聞き取り調査は語り手と聞き手の共同作業であるため、語り手がいちばん伝えたいことなにか、それを探りながら、語り手が主導権を持ち、聞き手はそこに寄り添いつつ事実確認（質問）を行うことを重視した。

日本の伝統的な平和学習は、戦争遺跡を見学したり、戦争体験者の話を聞いたりする活動を通して、戦争というものが人間の命と暮らしをいかに破壊する非人間的なものであるかを学習することである。すなわち、戦争被害（悲惨さ・過酷さなど）の継承が中心であり、その「教育内容」（教材）に比べ、戦争被害の学習を平和創造の主体形成へと結びつける「教育方法」（教え方）に対する関心が低かった。

したがって、そこにはつぎのような課題があるといえる。

- ①これまでの平和学習は、戦争の悲惨さや残酷さを学ぶことに焦点が当てられており、その学習が平和を作る思考と行動へ必ずしも結びついていないこと。
- ②戦争体験者の証言を活用しても、体験者個人の内面（心）や日常生活（身近な問題）に焦点が当てられており、そこに共感することはできても、現在の子どものたちの日常と時間的・地理的に「遠い」ところにある戦争の問題をどう切り結んでいくのか、日常と戦争を接続させて考えられていないこと。
- ③「平和な世の中がいい」ということは自明であるが、どうすればそれを実現することができるのか、具体的で現実的な回路がわからないこと。
- ④近い将来、身近なお年寄りから戦争体験を聞き取るという学習ができなくなり、「戦争体験」を継承すること自体が難しくなること。

子どもたちにとって、戦争は時間的にも、地理的にも「遠い」存在である。したがって、戦争や軍隊の悲惨さや過酷さを描くだけでは平和を希求する心は完全にはならない。戦争体験学習の後、子どもたちが「現代に生まれてよかった」「日本に生まれてよかった」という感想を抱いたとしたら、「遠い」戦争と現在とが乖離した、その平和教育は失敗といわざるをえない。なぜなら、それが平和な社会を作るために自ら活動することへと直接つながるわけではないと考えるからである。

戦後70年が過ぎ、この間、戦争遺跡の発見・発掘や「戦争体験」の収集が、全国各地で取り組まれてきた。これらの活動は、「なにが起こっていたのか」「何があったのか」、戦争の実態を解明するうえで、平和の伝承が「ヒトからモノへ」頼らざるを得ない状況下において欠かすことはできないものである。しかし、戦争の実態を解明した先になにを見通しているのか。それなくしては、こうした重要な活動も単に自己の「知りたい」という知的欲求を満たすためだけの活動になりかねない。

わたしたち「出水市戦争遺跡等保存活用プロジェクト」では、戦争遺跡や戦争体験談を平和学習に活用すべく、これまで活動してきた。そこには、これまで行ってきた戦争遺跡を見学する平和学習や戦争体験者の話を聞くという平和学習に対する反省が含まれている。平和学習が単に自らの被教育経験のみに依拠した直感的な学習であったり、発達段階などの教育的知見を無視した学習であったりするならば、必ずしも歴史に向き合い、平和の尊さを伝える場にならなくなってしまうと考えたのである。

平和学習を通じて、平和創造の主体を形成するためには、

- ①実際に戦争や軍隊を受け入れていた社会とはどのようなものだったのか。
 - ②当時の人びとが見つけていた問題とはなにか。
 - ③個々人がどのような社会的立場から、どのような行動をとり、相互に影響を与え合っていたか。
 - ④異なった個々人が互いにどう関わり合って社会を動かしていたか。
- を考える必要があるように思う。

「出水市戦争遺跡等保存活用プロジェクト」が行う平和学習では、これまで収集した戦争体験者の証言を活用し、ともすれば、個人の体験が実感を伴っているがゆえに、その実感に拘束されて、体験を超えた全体を視野におさ

めることが難しい個別的な「戦争体験」に対し、それを越えた普遍的な価値を見いだすことをめざしたのである。

わたしは、鹿児島大学教育学部（教員・学生）と、出水市教育委員会、一般社団法人出水民泊プランニング・平和学習ガイドの協力を得て、2016 年に中学校向けの平和学習プログラムを開発し、8 月 27 日、出水市内の中学生を対象に、「戦争の記憶」を未来につなぐ」ワークショップ（出水基地と地域の人々の関係性を考えるワークショップ）を開催した。

このワークショップは、子どもたちに「ミッション① 戦争関連施設と出水の人々にはどのような関係があったのか、解明せよ。」「ミッション② 出水の戦争関連施設ガイドツアーを PR するポスターを作成せよ。」を与え、事前学習・見学体験・戦争体験者の講話・事後学習を通して、ミッションの達成をめざす学習である。

また、2017 年には、小・中学校向けの平和学習プログラムを開発し、8 月 26 日、出水市内の小・中学生（小学校 3 年生から中学校 3 年生）を対象に、「戦争の記憶」を未来につなぐ」ワークショップ Part II（複数の体験者の人生を追いながら、ある時点での行動や気持ちを比較するワークショップ）を開催した。

このワークショップでは、「出水にのこる戦争証言を友だちに伝えるために証言ポスターを作ろう！」を学習のめあてとし、子どもたちに証言者の生活をたどりながら、当時の気持ちや様子を考える活動①と、当時のさまざまな立場の人の気持ちや様子の「同じところ」や「違うところ」を考える活動②を行った。この活動①・②で行った各自が証言記録を読み、その内容を責任をもって他者に伝える学習は、「戦争体験」を継承する（「戦争の記憶」を未来につなぐ）という行為を疑似体験することになる。

「戦争の記憶」を未来につなぐために、わたしたちにできることは、「歴史の現場」を歩いたり、歴史の体験者から証言（自伝や語り）を聞いたり、歴史資料を読み解くなどの活動を通して、なにがあったのか、なにが起きたのか、想像力を働かせることであり、個々人がそれぞれどのような立場から、どのような行動をとったのかを知ることである。すなわち、体験者の能動的な営みや受動的な営みに対し「共感共苦」することである。そして、過去の個人に自分を置き換え（当事者性）、自分にはなにができたのか、あるいは

できなかったのか、もし自分が〇〇だったらどうするかという「反実仮想」をすることである。そうすることで、「あの時代のどの段階であれば、別の、平和な時代を作る選択肢を人々は見いだせたのか」「別の選択肢を選びとる歴史的可能性はなかったのか」などの、判断する力を養うことができるのではないか。

おわりに——明治維新150年の歩みを確かなものとするために

本稿で述べた歴史資料や戦争体験者の証言は、地域の歴史遺産として最初からそこに「ある」ものではない。それらを地域の歴史遺産としてとらえる人びとがいて、そこに多種多様な技能をもつ人びとや、歴史遺産への関わり方がその人の立場（観光や教育など）によって多様な人びとが集まり、互いの関わり方が異なることを理解し合ったうえで、地域の歴史文化を豊かにするという方向性でゆるやかにまとまって協業したときに、ある歴史遺産を地域歴史遺産に「する」ことができるのである。

こうした人びとの新しい関係によって新しい歴史像を切り拓くことが、明治維新150年の歩みを確かなものとするに違いない。

〔附記〕

* 本稿は、2014年度～2017年度出水市戦争遺跡等保存整備事業における平和学習プログラム整備事業およびトヨタ財団・2015年度研究助成プログラム「戦争の〈記憶〉の継承とその利活用に資するアーカイブズの構築およびそれに基づく平和学習の新たな可能性の探究——平和を希求する心を育むための試み——」（研究代表者・佐藤宏之）による研究成果の一部である。

（さとう・ひろゆき 鹿児島大学教育学部准教授）